

四月は桜の季節である。三分咲き、五分咲き、満開と、どの段階の桜もそれぞれ美しいけれど散りかけの桜が何よりという人も多い。宵闇の中にぼくと浮かぶ桜の木、その下に立つと、次から次に落ちてくる花吹雪。はらはらと散る花びらを盃に受けて、そのまま飲み干す、そんな情景さえ浮かびそつだ。

桜の木は、木そのまま美しい。花が咲いている時もない時も。桜の花の思い出は、別れの季節の思い出でもあるからだろうか、さびしく美しい思い出につながってしまう。出会いと別れは人生につきものだけれど、何度経験しても、やはり別れはつらい。

あの日も、桜の花吹雪が美しい日だった。私は、喫茶店「再会」で、これからイギリスに旅立とうとしているNと向

かい合っていた。ふたりとも口数が少なく黙りこみがちだった。

「五年は帰って来れないと思っただ」とNがいった。

「元気でね」としか私には言葉がなかった。私はもう二杯めのコーヒーをまるで味などわからずに飲んでいた。それっきりNも何もいわず、喫茶店をでて、満開をわずかに過ぎた桜の木の下で別れた。桜の季節になると、Nと最後に逢った喫茶店「再会」と、桜の花吹雪の下を遠ざかっていったNの後ろ姿を思い出すのである。

